

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 5 月 30 日現在

機関番号：33401

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23560778

研究課題名(和文) 限界集落の再生に関する実践研究 - 勝山市小原集落の景観整備とイベント活動を通して

研究課題名(英文) Practical Study relating to the reproduction of the village through the action of events and the equipment of landscape of the Ohara village in Katsuyama-city

研究代表者

吉田 純一 (YOSHIDA, Junichi)

福井工業大学・工学部・教授

研究者番号：40108212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：石川県境に位置する小原集落(福井県勝山市北谷町)は、住民がわずか2人の限界集落、そして廃村の危機が迫っている集落である。本研究は、この小原集落の新たな再生、活用を試行する実践研究で、離村者を含む地元民(代表国吉一実)と協働し、集落内の空家の改修や石垣・水路・坂道などの補修を通して集落景観を整備するとともに集落を舞台として山村生活の体験や自然とのふれあい、あるいは旧村民を巻き込んだの篝火祭(8月お盆期間)の開催、山開き、山菜・木の実狩り、紅葉見物、雪山散策などの季節に応じた各種のイベントなどを行いながら、限界集落の新たな再生や活用を試行している。

研究成果の概要(英文)：Ohara-village in Kitadani-cho, Katsuyama-city, Fukui prefecture is located in the boundary with Ishikawa prefecture. This village approaches the crisis of the abandoned because village resident of this village is only two people. We are active for reproduction and activation of this village with local people. Concrete activity is enforcement of the event activity such as the repair of the unoccupied house, the maintenance of a village scene performing, the repair of a stone wall, a waterway, the slope and mountain village life experience, contact with nature, bonfire festival, opening ceremony of the Akasagi mountain, mushroom hunting, the snowy mountains walk, and so on.

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学 ・ 建築史・意匠

キーワード：限界集落 再生 家屋修復 景観 イベント

1. 研究開始当初の背景

65歳以上の高齢者が集落人口の半数以上を占め、村落共同体としての運営が成り立たない「限界集落」は、全国で7,800を超え、そのうち2,600余の集落は消滅の危機に晒されているという。このような「限界集落」に対する対策は急務の課題であるが、適切な対応がみつからず、「廃村」止む無しの風潮が強い。しかし、京都府綾部市の「水源の里」のように、地域がもつ豊かな自然環境や文化を見直しながら、再生や活性化を企て成功している事例も散見する。つまり、地域が独自にもつ特性を十分に把握し、適切な対応、活用方法を探り出せば、「限界集落」の再生、活性化が可能になると考えられる。

2. 研究の目的

本研究はこうした観点にたち、福井県内の「限界集落」のひとつである勝山市北谷町の小原集落を対象としてその再生、活性化を試みるものである。平成20年度～平成22年度には小原集落の家屋調査と修復活動を行いながら活性化の拠点づくりを実践し、大きな成果を上げることができた。平成23年度からは、「限界集落の活性化に関する実践研究」として、これまでの実績を基盤として家屋修復に加えて集落景観の整備・修景を行い、各種イベントを企画、実行しながら小原集落の活性化を目指していく。

3. 研究の方法

(1)勝山市小原集落は福井県の北西隅の標高約500mの山中に立地する。県内有数の豪雪地帯で、特に昭和38年(1963)の豪雪以降、離村が相次ぎ、現住する家はわずか2戸、「限界集落」を通り越し、まさに「廃村」寸前の状況にある。しかし、空き家が30棟余残存し、その多くは総2階建て、大壁造という白山麓民家特有の形式をもち、しかもこれらの家屋が山の斜面に段々状に建ち並び集落景観も特徴的である。山村とはいうものの、国道157号線が近くを通っていて勝山市街地から車でわずか10～15分の距離にあるために、連日のように畑作業や山林業に通ってくる旧村民も多い。また、豊かな自然環境に抱かれた集落風景のスケッチや写真撮影に訪れる人も良く見かけ、赤兎山や大長山への登山口になっていることもあって日曜や祭日には多くの登山者が行き交う。つまり、小原集落は「廃村」寸前ではあるが、その中に再生への一縷の光明がうかがえるのである。

こうした現状を捉えながら小原集落の再生、活性化を目指し、平成18年度に地元森林組合員と地元民を中心に「小原ECOプロジェクト」が組織された。この事業は小原集落を核としながら、周辺山林の保護・整備を行い、山林

や自然とのふれあい、山村生活の体験などを通して、小原集落の再生、活性化をめざすものである。平成18年度から22年度の家屋修復活動はこの一環として行われたもので、申請者の吉田を責任者として福井工業大学建築学科学生たちが担当した。一方、山林の保全や登山道の整備、炭焼きやきのこの菌付け、岩魚や山菜取りなどのイベント活動はおもに地元森林組合員と地元民が担当してきた。平成23年度以降においては、修復民家を拠点としながら、おもに小原集落の景観整備・保全に取り組み、あわせて地元民との協働によって新たなイベント活動を展開し、小原集落の再生、活性化を目指す。

(2)「小原ECOプロジェクト」は設立から5年が経過し、着実にその成果を挙げている。修復家屋はすでに5棟を数え、50人程度の宿泊が可能になった。しかし、倒壊した家屋の残骸や見事な石垣を隠す雑草などは集落景観を損ねている。小原集落の再生、活性化にとって、良好な集落景観を保持することも重要なことである。本年度からは倒壊家屋の撤去や除草を行いながら、集落景観の整備活動を行う計画である。また、地元民との協働で、小原集落を拠点とした各種イベント、たとえば、きのこの菌付け、山菜採り、岩魚とりなどの川あそび、炭焼き体験、小原に伝わる固豆腐づくりやお茶づくり、あるいは雪山散策や豪雪体験、兎狩りなどのイベントを継続的に実施し、ソフト面からの小原集落の活性化、再生も図っていききたい。さらにこれまでの調査成果をさらに充実させるために周辺村落の家屋調査を行い、白山麓民家の特質あるいは成立や・発展の経緯を捉えていく。

以上、(1)集落景観の整備・保全、(2)各種イベント活動の展開、(3)白山麓民家の特質の解明をテーマに掲げ、平成23年度から3カ年計画で、小原集落の再生、活性化活動を実践していく。

(3)建築史の研究は、古建築の歴史的価値あるいは文化的価値、保存など学術的側面の解明に主眼が置かれていた。しかし、今日ではこうした歴史的建築をいかに再生し、活用すべきか、すなわち実用性にも眼が向けられている。歴史的建築をいかに現代社会に活かして行くかといった視点である。これはとりもなおさず、歴史的建築の保存にもつながるのである。

(4)本研究はこうした歴史的建築の活用に主眼を置いている点に大きな特色がある。さらに、平成18年度から平成22年度に行われた家屋修復において、学生たちは大工棟梁の指導を受けながら現場で直に建築に触れ、自分の目で確かめながら講義で得た知識を体感しながら吸収し、また「ものづくり」の楽しさ、大変さも実感している。すなわち、この研究

は建築の実践教育としても大きな成果を挙げている。さらに参加者全員が現地に泊り込んで合宿生活を送ることによって、学生たちに協調性が生まれ、地域民との交流を通してコミュニケーション力も養われている。さらに今日大学が求められている地域連携活動としても大きな成果をあげている。

4. 研究成果

平成 23 年度から平成 25 年度における成果は以下のとおりである。

平成 23 年度

(1)作業期間：8月8日～31日

(2)作業内容：道場誓家住宅の土壁補修、下屋再建、家屋調査および岩本信子家住宅外壁板張替、石垣や空き地の草刈り、通路・水路整備

(3)学生参加者：16名

道場家住宅の外壁は土塗り大壁であるが、剥落箇所が随所にあった。そこで、平成 21 年の北山家住宅修復の際に保管しておいた壁土を再利用し、枝木の木舞に縄を結び付けて壁土を貼りつけるという小原古来の構法を用いて外壁の補修を行った。そして南面にあった下屋は撤去されていたが、旧柱の一部やつなぎ梁の仕口痕跡などから旧状に近い形で下屋を復元再生した。また、岩本家住宅はおもに正面外壁の板張補修を行った。

これら家屋修復と並行して石垣や空き地の草刈り作業、水路や坂道の点検、補修を行うなど集落景観の整備を行った。

平成 24 年度

(1)作業期間：8月7日～31日

(2)作業内容：道場誓家住宅の屋根瓦葺替、岸下稔家住宅家屋調査および石垣や空き地の草刈り、通路・水路整備、第 1 回小原篝火祭開催（8/13、来場者約 50 名）

(3)学生参加者：23名

道場家住宅の屋根は戦後のセメント瓦が葺かれていたが、破損が顕著であり、鯖江市の T 家改修で譲り請けていた土瓦を再利用し、地元の瓦葺職人の指導を受けて葺替えた。岸下家住宅は平面、断面、構造などに関する学術調査を実施。また石垣や空き地の草刈り、水路や坂道の点検、補修も前年同様、継続的に集落景観整備作業を行った。

イベント活動としては、新たに旧盆の 8 月 13 日夜に「小原篝火祭」を開催した。旧小学校跡地に足場材を用いて方 3 間の能舞台を造り、その周囲や集落内に 13 基の篝火を焚き、坂道脇など 100 個の手づくり燈籠も並べて集落内をライトアップしての会場を設営。能舞台では金沢および福井市内の能愛好者の上演および地元民による民謡や踊りの発表を企画。離村者や旧盆の帰省者など 50 余名の参加があった。ただし、上演中、思いもよらぬ暴風雨に襲われ、急遽会場を小原道場に移して行わざるを得なかった。

平成 25 年度

(1)作業期間：8月7日～31日

(2)作業内容：道場誓家住宅の内部整備、岸下稔家住宅屋根葺替および石垣や空き地の草刈り、通路・水路整備、第 2 回小原篝火祭開催（8/13、来場者約 70 名）

(3)学生参加者：18名

平成 23 年、24 年の作業で、外壁と屋根が整備された道場家住宅の内部を改修した。おもに 1, 2 階の床補修と内壁板張である。この整備によって道場家住宅は今後の小原 ECO プロジェクト活動の一拠点として活用が可能になった。道場家の前にある岸下家住宅の屋根瓦葺替も行った。瓦葺替作業は前年度の道場家住宅で経験済みであり、作業はスムーズに進んだ。

石垣の草刈り、水路・坂道の点検、補修、空き地の草刈りなどの景観整備作業は従前通り実施。

昨年度、初めて開催した「小原篝火祭」を本年度も実施。今年度は天候にも恵まれ、仮設能舞台において能舞いを上演、地元民の芸能も披露された。来場者は離村者、旧盆帰省者を含め、70 余名あり、盛況の中でイベントを開催できた。

平成 23 年度～25 年度の総括

この 3 年間において修復整備した道場家住宅は集落内を通る道沿いにあり、小原 ECO プロジェクト活動の事務所や本部としての活用が期待できる。また、外観や屋根を改修した岩山信子家住宅と岸下稔家住宅も道場家の周囲にあり、今回の一連の古民家修復、改修によって、この一画も小原の集落の景観整備区域となった。

またイベント活動としては平成 24 年度に開催した「小原篝火祭」が特筆されるが、春の赤兎山と大長山の開山式(祭)、山菜取り、や秋のキノコ狩り、や紅葉狩り、冬の雪山散策、トレッキング、あるいは山村体験ツアーなどは毎年欠かさず実施している。さらにグリーンツーリズムとの協賛で、東南アジアの若者たちの山村体験イベントも欠かさず開催されている。こうしたこともあって小原への来訪者は年間 1,000 人を超す状況である。

つまり、小原集落は限界集落を通り越し、廃村間近の集落ではあるが、我々の小原 ECO プロジェクトの活動によって、こんごの存続に向けて新たな息吹が芽生えているのである。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 7 件)

(1)多米淑人・吉田純一「勝山市小原の岸下稔家住宅」日本建築学会北陸支部研究報告集(金沢工大)平成 25 年 5 月 19 日

(2)多米淑人・吉田純一「勝山市小原における学生主体の集落活性化活動」日本建築学会北陸支部研究報告集(金沢工大)平成 25 年 5 月 19 日

(3)吉田純一・岩井清健「大正 2 年再建の小原道場について(その 4)」『御道場帳』の柱材」

日本建築学会学術講演梗概集（名古屋大）平成 24 年 9 月 12 日

(4)岩井清健・吉田純一「大正 2 年再建の小原道場について（その 1）茅葺屋根の復元」日本建築学会北陸支部研究報告集（信州大）平成 24 年 7 月 22 日

(5)吉田純一・岩井清健「大正 2 年再建の小原道場について（その 2）再建工事の様相」日本建築学会北陸支部研究報告集（信州大）平成 24 年 7 月 22 日

(6)吉田純一・岩井清健「大正 2 年再建の小原道場について（その 3）村人たちの寄付の状況」日本建築学会北陸支部研究報告集（信州大）平成 24 年 7 月 22 日

(7)多米淑人・吉田純一「勝山市小原の岩山家住宅」日本建築学会北陸支部研究報告集（信州大）平成 24 年 7 月 22 日

その他（2 件）

(1)吉田純一「みんなでつくった小原の道場」小原道場の建設 100 周年を祝う会での記念講演 平成 25 年 9 月 29 日 勝山市小原集落

(2)吉田純一・多米淑人他「限界集落の再生活動（小原 E C O プロジェクト紹介）」福井テレビ『座・タイムリーふくい』平成 25 年 8 月 10 日

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田純一（YOSHIDA Junichi）

福井工業大学・工学部・教授

研究者番号：40108212

(2)研究分担者

多米淑人（TAME Yoshihito）

福井工業大学・工学部・准教授

研究者番号：60511920